

〈研究ノート〉

# 中国雲南省新平県における「彝回」について ——食習慣の変化とイスラーム復興——

松本光太郎

はじめに

この研究ノートでは、中国雲南省の「彝回」における食習慣の変化とイスラーム復興について注目する。しかしながら、回族の人々にとって食習慣の変化は、場合によっては「祖先に対して申し訳ないという感じのすること」であり、具体的な地名については明記しなかった。読者の方々の御理解を賜りたい。

この研究ノートの執筆にあたり、現地での調査に協力して下さった方々に、心より感謝の意を表する。

## 1. 中国雲南省における「彝回」について

中国には公式統計で約2,000万人のイスラーム教徒、すなわちムスリムがいると言われる。その中で、宗教的にはイスラーム教徒であるが、日常的には漢語を話し、多くの点で漢族に類似した特徴を持つ集団のことを回族と呼ぶ。回族は、中国政府によって公式に独自の「民族」であると認定された56の民族の一つである。

回族の「回」という呼称は、伝統的には主に漢族がイスラーム教徒全般のことを指す呼称として用いられ、清朝から民国時代には、服装によって、ターバンを巻き、漢族とは明らかに異なった言語や特徴を備えたウイグル人などを「纏回」、漢族と同じような服装をして、漢族と似通った特徴を持つ現在の回族のことを「漢回」と呼んだ。さらには、地名などによって「サラール回」、「東郷回」、「保安回」などと呼ばれていた諸集団が、中国政府によってそれぞれ独自の民族として公認されているが、こうした分類については疑問視する向きもある（宗教的には同一の集団であるにもかかわらず、こうした人々を別々の民族として分類することについての疑問である。「宗教」と「民族」の関係については、いずれ別の機会に述べることにする）。

雲南省には、少数民族地域に移住したことから、それぞれの地域の少数民族の言語や服装

中国雲南省新平県における「彝回」について

などの影響を受けたいくつかの諸集団が存在する。これらのうち、白族（ペー族）の影響を受けた集団のことを「白回」、タイ族の影響を受けた集団のことを「タイ回」（あるいはタイ語でパーシー・タイ）、蔵族（チベット族）の影響を受けた集団のことを「蔵回」、それに加えて彝族（イ族）の影響を受けた集団のことを「彝回」と呼ぶことがある。なぜ、呼ぶことがあると述べたかと言えば、こうした呼称は主に漢族、なかでも研究者が好んで用いる呼称であって、こうした諸集団に属する人々自身の多くは、自らを回族であると見なしているからである。なお、「タイ回」の人々は、自らも「タイ回」あるいは「パーシー・タイ」という呼称を用いるが、身分証明書に記載された「民族」（政府によって公認された民族的帰属、「民族成分」）は、やはり回族である。

こうした雲南の諸集団の中で、これまで詳しい資料がないのにも関わらず、時折その呼称が用いられるのが「彝回」と呼ばれる人々である。「彝回」の人々は、これまでわかった範囲では、雲南省玉溪市新平彝族自治县と楚雄彝族自治州南華県などに分布しているが、それ以外の地域にもまだまだ分布しているようである。本研究ノートは、新平県において行った聞き取り調査の覚え書きであり、今後も継続調査を行う予定である。

シーサンパンナ・タイ族自治州モンハイ県の「タイ回」、大理白族自治州洱源県の「白回」、迪慶藏族自治州香格里拉（シャングリラ）県の「蔵回」についても、それぞれ調査を行っているが、いずれ機会を改めて報告したい。

## 2. 新平県におけるいくつかの事例

### (1) 市街地の A モスクでの聞き取り

「彝回」の人々の住む村々に行く前に、こうした村落の事情をある程度まで把握している、市街地の A モスクの教長（イマーム）に聞き取りを行った。こちらからの質問では「彝回」の呼称を用いたが、教長からの説明の中では「彝族に変わった（中国語で「変彝」）」という表現が用いられていた。

教長の説明では、彝族に変わってしまったが、後にイスラームの信仰を回復した村落について、まず説明があった。こうした村落は新平県に二カ所あり、雲南南部のイスラームの中心地である沙甸の回族からの援助でモスクが建設された。沙甸の回族から援助を得ることができたのは、新平県出身で、明代に雲南を統治したムスリム出身の沐英の子孫にあたる人物が、昆明のイスラーム学校の同窓生にあたる沙甸の著名な回族と香港で再会し、この同窓生が新平県に彝族に変わった村落があることを聞いて、モスク建設のための資金を提供することになったからである。

一方の村落（B 村）では、もともとモスクがなく、経済的な事情からすぐには実現しなかったが、後にモスクが建設された。もう一方の村落（C 村）では、古くからモスクがあった

が、清代の「杜文秀起義」(太平天国とほぼ同時期に雲南で起こった回民の抵抗運動、失敗に終わり多数の回民が犠牲になった)失敗の際に焼かれてしまい、1996年に再建された。いずれも沙甸の回族からの資金援助によるもので、通海県の納家営や峨山県などの回族からも援助があった。

以上はイスラームの信仰を回復した村落であるが、「彝族に変わってしまった」村落は以下の通りである。なお、これらの村落の分布については、定期バスを運転する回族のドライバーからも聞き取りを行った。以下、異なる郷鎮毎にこれらの村落の分布を示しておく(郷鎮名は省略)。

・D村:教長の説明では、戸籍上は回族であるが、「乱吃」、つまり食習慣が変化してブタ肉も食べるようになっており、主に彝語を話し、彝族の民族衣装を着ており、漢語を話せない人もいる。Aモスクでムハンマド聖誕祭を行った時に、この村から参加した人がいたが、彝語しか話せなかった。D村には新寨と老寨があり、以上の話しはそのどちらかについてのことである。「擺夷」<sup>バィイ</sup>、つまりタイ族(花腰タイ)の人々(数百人)と雑居しており、タイ族が多数を占めている。ドライバーの説明では、彝族に変わってから、モスクはなくなってしまった。また、付近には、回族の住む村はここしかない。

・E村, F村:教長の説明では、現在では回族はいない。二つの村落ともに、「変わってしまった(中国語で「変了」)。ドライバーの説明では、馬姓の人が多いが、回族はいない(ここには「馬家」(馬姓の家族の意味)のつく地名がある)。

・G村:教長の説明では、地名に言及したのみで、詳しい説明はなかった。ドライバーの説明では、ここには回族はおらず、漢族が多い。

・H村, I村:ドライバーの説明では、これらの地名に言及し、このうちのI村に回族がいるという。教長の説明では共に言及されなかった。

Aモスクにいた若い回族の説明では、ドライバーの説明では回族がないという村にも、実際には回族がいるということであった。

## (2) D村新寨での聞き取り

D村近くの郷鎮で、オート三輪のドライバー数名にD村への行き方を尋ねたところ、D村新寨については漢語の地名を知らず、タイ語の地名しか知らなかった。またD村老寨は山奥の遠いところにあるが、近くまで道路が通じているという。「彝族に変わってしまっ

中国雲南省新平県における「彝回」について

た」村落については、こうした地元のドライバーも必ずしも回族の村落として認識していないようである。

D村新寨は、盆地の水田から山の斜面に上がって行く場所にある。ここでは、村の下手と上手で住民の民族が異なる。水田に近い下手には花腰タイの人々が住んでおり、花腰タイの人々は「ここはタイ族と漢族の村である」と最初は説明していたが、あとから渋々と「回族もいる」と認めた。こちらの「馬姓の人が多くないか」という質問に対する回答である。

元々、回族は山のずっと上の方に住んでいたが、三十年ほど前に政府がこの村の土地を分け与えてここに住むようになったという。花腰タイの人々から、回族の人々が「漢族」であると見なされているのは、回族としての特徴が希薄化したためであろうか。同行した回族の知人によれば、土地の問題で両者の関係があまりよくないのではないかという。

花腰タイの人々の説明によれば、回族の人々が元々住んでいたD村老寨には、おそらく老人などが少数住んでいるらしく、舗装道路が通じているという。また、モスクはないが、彝族の土司府（中国王朝による間接統治政策により、官位を与えられた少数民族の世襲的な首長の地方政府）があるという。シーサンパンナのタイ回のような土司との関係があるのかどうか興味を引かれる。

村の上手に上がって行くと、村内の売店の近くに数名の男性がいたので、聞き取りを行った。この村には、20数戸、約60人の回族が住んでいて、全て馬姓であるという。この村ではタイ族（花腰タイ）と雑居しているので、「彝回」から「タイ回」になってしまったのではという印象を受けた。以下は、彼らとの問答の一部始終である（必ずしも必要ない場合は、こちらからの質問は省略してある）。

Q：「(同行した知人が自分も回族であると紹介した上で) あなた達は回族ですか？」

A：「そうです。回族です。」

Q：「よかったら身分証を見せて下さい。」

A：「どうぞ（「民族」は「回族」であることを確認）。」「ここにはモスクはありません。」

「アラビア語はわかりません。」「イスラーム教、回教のことは知りません。」「(こちらから尋ねたのではなく自発的に) 私たちはブタ肉を食べています。タイ族と一緒に住んでいるので、ブタも鶏も飼っています。」「山の上の村からここに移って来ました。山の上に残っている人は少ないです。」

ここで、同行した知人が親族名称など、アラビア（ペルシア）語や「経堂語」（回族が用いる独特の漢語で、アラビア語やペルシア語の影響も見られる）について質問するが、答えは全て漢語であった。

Q:「いつから回族であると申請したのですか?」(政府に要求して、後から回族であることが認められたのかという意味の質問)

A:「申請したのではなく、元々回族ですが、1950年代の解放初期に回族として登録しました。」「タイ語を話すが、これは若い人で、普通は漢語を話します。彝語はわかりません。」「外へ出稼ぎに行っている人がいますが、回族で仕事についている人には、一ヶ月8元の食費の補助がつきます。」(ハラール、すなわちイスラームの食習慣を遵守するための補助のようである)「ここへやって来たのは、旧社会のことで、理由はわかりません。民国か清朝の頃です。」「かつては、回族であれば植物油の配給が受けられたのですが、沙甸事件(「文化大革命」の時に行われた回族に対する迫害、数千人の死傷者が出た)の頃には中断され、その後また復活しました。」「通海県の人がやって来て、お客に呼ばれて、大きな宴席でもてなされたことがあります(これはどうやら漢族からの招きらしい)。」

こうしたやり取りの中で、数人の回族のうち60歳代の男性が、やや恥ずかしそうに苦笑いしながら、上述のように自ら「私たちはブタ肉を食べています」と述べたのであるが、同行した回族の知人は「こういう言い方をするのは、初めて聞いた」と驚いていた。回族の知人によれば、都市生活をしている回族の中には、少なからずブタ肉を食べる人がいて、通常は「乱吃」(なんでも食べるという意味)という言い方をするが、あまり問題になることはない。ただし、もしも「ブタ肉を食べている」という話しを他の回族の人に話してしまうと、聞いた人から「祖先に対して申し訳ないことをしている」と言われるので、表向きには言わないようにしている人が多いということである。

また、筆者はこの村で彝族の服装をしている回族を見かけることはなかった。「彝回」が「タイ回」に変わってしまったのではないかと書いたが、そもそも彝語が話せないのであれば、「彝回」という呼称はあまり適当ではないのではないか。彝族の服装や言語については、上記のように、市街地のAモスクの教長が、彝語しか話せず、彝族の衣装を着ている人がいるという話しをしていた。これに関して、同行した知人は帰り道で村の下手で彝族の服装をしている女性をみかけたという。タイ族が彝族の服装を着るということは考えにくいので、回族の女性だったのかもしれない。再調査の課題である。

なお、新平県は現在、花腰タイの観光開発で賑わっている。帰り道に水田の側の大きな木の下で刺繍をしている二人の花腰タイの女性に出会った。また、農作業からの帰り道の花腰タイの男性によれば、ここのタイ族は仏教のことを知らず、水かけ祭りも行わないという。タイ族の多くは上座部仏教を信仰し、タイ国でいうソンクラーン、つまり水かけ祭りを行うのであるが、仏教の影響を受けていないタイ族の事例として興味深い。

### (3) D村老寨での聞き取り

D村老寨は、新寨近くの郷鎮から30~40km、3,000m級の嶺嶺が連なる哀牢山脈の中にあった。この村落が属する村公所（弁事処）に立ち寄って、案内を頼んだ。3,000m近い高地の山道を30分ほど登って、ようやくD村新寨に到着した。この村落は、30数戸、100人余りで、7種類の民族が雑居しており、回族はその一部である。

回族の人々の多くは農作業に出ていて不在であったが、たまたま家にいた一家（男性とその母親、孫娘）から聞き取りをおこなった。また、家の庭の中で二頭のブタが飼われていた。身分証明書の代わりに「常住人口登記カード」を見せていただいたが、「民族」が「回族」であるのに対して、「宗教信仰」は空白のままであった（この理由については質問しなかった）。以下は、この男性からの回答である。

A：「モスクはないし、これまでもなかった。」「父親は漢語で大爹と呼ぶ。」「祖先は江蘇省（後述するように墓碑では江西省）からやって来たが、いつのことかはわからない。」「彝語は話せない。普通は漢語を話している。」「ブタ肉を食べる。牛肉や鶏肉も食べる。」「葬式の時には、牛や鶏を屠殺して献げるが、ブタは献げない。ただし、日常的にはブタ肉を食べており、売ることもある。」（同行した回族の知人が、より直接的に「ブタの頭を献げることができるのか」という質問をしたのに対しては、「できない」と答えた後で、前述のように説明した。）「老祖（祖父の意味らしい）の頃には、ブタ肉を食べていなかった。現在でも、老人は一ヶ月に数日間、ブタ肉を食べない日がある。」「（モスクはないということなので墓碑を見に行くことになったが）清明節には墓参をする。」

墓碑を見に行く途中で、回族の女性が小学生くらいの女の子二人と一緒に籠一杯の農作物を背負って家路を急いでいるのに出会った。墓碑は、村公所への別の帰り道の途中の草むらの中にあり、一部しか見ることができなかった。墓碑は漢語で書かれており、清代のもので、「原籍江西省」の記載があった。アラビア語の記載のある墓碑があるかどうかは、今後の調査の課題である。

村公所まで帰って来ると、同行した男性が「この人は物知りである」という回族の老人に出会った。回族の知人の「いつ頃変わってしまったのか（食習慣の変化についての質問であるが、本来の回族でなくなってしまったのはいつ頃かというニュアンスに近い）」という質問に対して、「老祖のころに、回族は捕まって首を切られるというので、変わってしまった（中国語の「変了」、残念なことに本来の回族ではなくなってしまったというニュアンスに近い）」と答えた。ここでも、やや恥ずかしげに、自嘲気味に答えていた。さらには、「自分たちは、ニセの回族（假回族）ですよ」とまで言った。回族の知人によれば、「老祖」は祖父



の意味なので、100年前ぐらい、つまり杜文秀反乱の時代のことではないかという。

この老人と別れた後、前述の彝族の土司府を見学した。「隴西世族庄園」という観光地になっていた。園内には、民国時代に雲南を統治した、彝族出身の龍雲の題字のある扁額が飾られていた。また、この場所がいわゆる「茶馬古道」(キャラバンルート)にあたることの説明や展示があった。

回族の知人によれば、伝聞の話しとして「ブタを飼うのは女性の仕事で、男性は関与しない」ということであるが、聞き取りの中では単にブタを飼っているという説明しかなかった。また、D村老寨で訪問した際の写真に、男性の母親が彝族の日常的な衣装と似た服装をしている場面があるのに気がついたが、頭のかぶり物が彝族独特のものなのか、あるいはムスリム女性としてのかぶり物なのか、あるいは漢族と大差ないものなのか、判別できなかった。これらも今後の調査の課題である。

#### (4) I村での聞き取り

I村は、戸籍上も彝族になってしまった事例である。主にI村の党書記を含む数名の男性に聞き取りを行った。

I村の総人口は2,070人、そのうち本来は回族であるという意識を持っている人々は約800人、85戸である。それ以外は全て彝族で、漢族はいない。また、回族という意識を持っている人々の80~90%が馬姓である。「どうして回族であると言えるのか」という質問に対しては、「死ぬのを恐れて彝族に変わってしまったと老人が言っていた」からだという。戸籍、身分証明書ともに彝族である。彝語を話すことができるが、老人がよく話せるのに対して、若い人はあまり話せない。親族名称は漢語を用いている。彝族の衣装は着ていない。

どうして回族であると言えるのかということについては、新しく作った家譜があるということで、もとは新華寨という場所からここへ移住し、近隣の峨山県や墨江県の他郎にもここから移住した回族がいるという(他郎は西北回民反乱で敗北したジャフリーア派の指導者の二人の遺児が逃げて来た場所であり、本来はジャフリーア派であったかどうか興味深い)。新しい家譜として示されたのは、現代出版社・華芸出版社から出版された『中華姓氏譜：馬』という一冊の本であったが、具体的にどのページに書いてあるかについては紹介されなかった(例えば広西のチワン族の場合には、チワン族の祖先が漢族であったという伝説にもとづいた記載が、こうした新しく出版された本の中にも書かれていることがあるので、この本についても確認が必要である。I村の事例だけでなく、他の地域の回族に関する記述があるかもしれない)。

墓碑によれば、祖先は雲南に広く流伝している「南京応天府」から移住してきたとあり、始祖は馬俊という名前であり、昆明の南にある滇池に駐屯した後、河西(現在の通海県)と墨江県の他郎に移住し、さらに「夷匪」(「夷」は少数民族に対する蔑称で、「彝族」の「彝

中国雲南省新平県における「彝回」について

の旧称でもあるが、回族のことを指す可能性もある)の討伐のために新化に駐屯したという記述がある。『玉溪地区民族志』(玉溪地区民族事務委員会編 1992: 170-171)にも類似した記述がある。

党書記の説明では、墨江の他郎では鉞山開発をめぐる回族と彝族との械闘(集団間の武力紛争)が起り、回族が少数だったために、彝族と一緒に住むようになり、彝語を話すようになった。彝族に変わってしまった(中国語で「変了」)後、彝族に同化されてしまった。回族の習慣、回族のものはなくなってしまった。ただし、彝語を話すことは出来ず、これは以前も同じで、風俗習慣(言外に食習慣の変化を指している)が彝族と同じになった。彝語は簡単なことならば聞くことはできるという。話しが自己矛盾しているが、以上は党書記の説明のままであり、現状では彝語がそれほど上手ではないということについての釈明であると思われる。さもないと、元々の回族の姿としては、彝語は話さなかったという意味なのかもしれない。

さらに、始祖の馬俊は明代に雲南を統治したムスリム出身の沐英と一緒に約 400 年前に移住してきたが、五代目までは全て男子一人であり(馬俊以前を含めると 12 代になるという)、六代目になって 12 人の男子に分かれたという(伝説的な時代から、系譜関係が具体的になったということか)。墨江の他郎には 400 年前に分かれた親戚がいて、墓参(中国語で「上墳」)にやって来るという(これもジャフリーア派であることを想起させる)。これに対して、峨山県からもしばしば祖先祭祀にやって来るが、この人々は彝族だという。現在中国で盛んに行われる祖先祭祀の復活による家譜の再編成の流れの一つか、峨山県にも「彝族に変わった」回族がいるのかは、今後の調査の課題である。

また、党書記の説明では「身分証明書は彝族に変わってしまった(中国語の「改成彝族」)」という言い方をしていたが、新平県老街の人々も彼らの親戚で、同じ一族であるという。ただし、新平県老街の人々は回族で宗教信仰上も回族であるが、I 村では宗教信仰も彝族と同じで、祖先にはブタの頭を献げる。食習慣も彝族と同じになってしまったという。この他、D 村老寨の人々が 1995 年にここへ来たことがあるが、D 村老寨の墓碑に I 村から移住したという記載があるという。I 村の古い墓碑は、「文化大革命」時代にほとんど破壊されてしまったという。さらには、通海県納家營の回族の人からお祭りに呼ばれたが、風俗習慣が彝族と同じになってしまったので行かなかったことがあったという。

こうした I 村の回族の民族成分(民族的帰属)については、県政府の統一戦線部の担当者から「回族のことは顧慮しないようにして、彝族のままでいるように」と言われているが、統一戦線部も I 村の人々が回族であることは知っており、『新平県志』にも記載があるはずだという。筆者はまだこの資料を確認していないので、今後の課題となる。

なお、以前は I 村の小組長(現在の党書記に相当とのこと)は必ず彝族で、回族はならせてもらえなかった。この党書記が初めて入党を許され、初めて党書記になったという話して



あった。これも、回族に対する蔑視であろうか。

古くは村の下手にモスクがあったが、200年前ぐらいになくなってしまった。原因はわからない。これは100歳以上の老人から聞いた話であるという。イスラームのことはわからなくなってしまう。墓碑にもアラビア語は書かれていない。ただし、同行した回族の知人によれば、「前後世」という表現が墓碑の対聯に見られ、これはイスラームの「前世」「後世」と関係があるのではないかという指摘があった。墓参は（彝族と同様に）10月1日に行く。住居も彝族と同じ構造である（いわゆる日干し煉瓦の平屋根二階建ての「土掌房」である）。ラマダーンもマウリド（ムハンマド聖誕祭）も行ったことはない。

新平県の「彝回」にも、次のB村の事例のようにイスラームへの信仰を復活させた事例もあれば、I村のようにそうでない事例もあることがわかった。

### 3. 「彝回」におけるイスラーム復活

B村は、沙甸などからの援助により、モスクを再建し、イスラームへの信仰を回復した事例である。B村の総人口は130戸余り、570～580人、そのうち回族は48戸、192人で、彝族、漢族と雑居している。回族はやはり村落の上手に住んでいるが、モスクは十分な面積の耕地を占有しているという。回族が村の上手に住んでいるのは、農地への距離の問題もあるが、飲料水をハラールの状態に保つ目的があるかもしれない。モスクの管理委員（中国語で「管事」）の人々から聞き取りをした。

「文革」以前には回族の女性は彝族の衣装を着ていたが、「文革」以後は漢族の衣装に改められ、彝族の女性も彝族の民族衣装を着なくなってしまう。回族にも彝語を話せる人はいて、特に高齢者は流暢な彝語を話すことができるが、そもそも彝族でも彝語の話せる人は以前から少数であり、したがって漢族や回族でも彝語の話せる人はごく少数であるという。実際には、筆者が彝語の簡単な単語や日常表現を尋ねたところ、管事の人々はどれも答えることができた。「少ししか話せない」と謙遜していたが、彝語をかなり話せるようである（筆者は、石林や昆明で刺繍を売っていた、彝族の下部集団の一つであるサニ人からごく簡単な彝語の表現を学んだことがある）。

B村の回族がいつ頃移住したのかは不明であり、伝説があるという話しであるが、十分に聞き取りをする時間がなかった。身分証明書の「民族」は以前からずっと回族であり、「文革」時代に食習慣が変化した。1993年に「ムスリムの食習慣に戻った」（中国語で「回帰穆斯林的飲食習慣」）という。

かつては市街地（中国語で「県城」）にモスクがあったが（県城のモスクの教坊に属していたということか）、1994年に現在のモスクが建設された。雲南省全体からの資金援助があったが、特に沙甸からの援助が大きかった。現在のアホーン（イマーム）は貴州省偉寧彝族

中国雲南省新平県における「彝回」について

回族苗族自治州出身で、学生が二人いる。アホーンは、B村からはあまり学生が集まらないので、貴州省へ学生の募集に行っていた。アホーンは第五代目で、25歳と若く、通海県古城の中阿学校（中国語アラビア語学校）を卒業して、アホーンの資格を得た。第五代目までの出身地は、以下の通りである。

- 第一代目 雲南省硯山県平遠鎮田心村
- 第二代目 雲南省邱北県
- 第三代目 雲南省巍山県樹龍村
- 第四代目 雲南省禄豊県
- 第五代目 貴州省偉寧彝族回族苗族自治州

モスクの管理委員、すなわち管事は現在4名で、全員この村の出身である。沐姓の人が多く、沐英の子孫であるという。いずれも沙甸清真大寺、通海県納家营清真大寺（当時は納本慈氏が校長）で学んだが、卒業せずに帰って来たため、管事に選ばれたという事情があるようである。なお、管事は民主的な無記名投票で選ばれたという。現在でも、この村出身の学生が通海県古城の中阿学校で学んでいるこの村出身の学生がおり、来年卒業予定である。

ムハンマド聖誕祭（中国語で「做節」あるいは「聖誕節」）は毎年行い、村外のモスクの聖誕祭に参加する場合もあり、管事の人々も行ったことがある。行き先は、通海県、玉溪市、峨山県、沙甸などである。夏は雨で道がよくないため、この村の聖誕祭が行われるのは冬である。聖誕祭の時かどうかは不明であるが、巍山県にも行ったことがあるという。

清朝の乾隆年間の古い墓碑があり、アラビア語の記載があるという話しであったが、時間の関係で訪問することができなかった。これも今後の調査の課題である。

C村は時間の関係で行けなかったため、今後の調査の課題となる。

## おわりに

雲南省の回族の間では、現在主にパキスタンや東南アジアなどからのタブリーグ・ダアワ運動の影響が広がりつつある。雲南省のイスラームの中心地に数えられる沙甸などから盛んに各地へイスラームへの信仰の復活を促す援助活動が行われているが、これらにタブリーグ・ダアワ運動からの影響があることは否定できない。タブリーグ・ダアワは、タブリーギー・ジャマーアトとも呼ばれ、イギリス統治下の北インドでモウラーナー・ムハンマド・イリヤースが始めた運動で、当面の政治問題への関与を慎むことや、イスラームの教派間の相違にとらわれないことなどを基調とする。この研究ノートで取り上げた新平県の事例も、こうした大きな枠組みの中でとらえて行く必要がある。

また、中国におけるブタ肉を食べる回族については、砂井紫里氏による中国東南部についての研究が知られている。この研究ノート執筆にあたって、同氏から貴重な示唆をいただいたことに感謝の意を表するとともに、同氏が雲南省の事例についても、より水準の高い研究をされるものと期待する。

#### 参 考 文 献

玉溪地区民族事務委員会編

1992 『玉溪地区民族志』, 昆明: 雲南民族出版社。

砂井 紫里

2001 「中国東南沿海部・回族における〈食べ物〉としてのブタと宗教・民族アイデンティティ」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』46(4):105-116.

2004 「食事行動とその空間におけるアイデンティティ複合——中国東南沿海部回族の一地域集団の事例から」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』49(4):81-89.